

鹿町町 風力発電所近辺 謎の石塁について

佐世保
遺跡
レポート

7月27日。番組当てにメールが来た、「鹿町の風力発電の100Mほど手前にある石塁は何でしょう？」というものだった。

週があけて月曜日に現地調査に向かった。場所は以前勲を頼りに風車を目指して辿り着けなかった教訓があるため、小佐々に詳しい知人に聞き、今回は迷うことなくすんなりと**鹿町ウィンドファーム**の入り口にまでは着いた。入り口付近を散策したがそれらしき石塁は見つからないので、看板がある入り口から中へ入ることにした。坂道を登り最初のU字カーブで、すぐにそれだとわかる石群を発見した。車を端に寄せ。全体を眺めると、広い草原の中央にぽつんと石塁があり種類は分からないが2・3本の木とその周りにいくつかの巨石が地面から顔をのぞかせてそれらがひとかたまりにかつてはそこに何かしらの建物があったのではないかと思わせるような遺構の姿を見せている。その背景には北九十九島の景色が見える。しかし、その石塁よりも目につくのが石塁の頭上、崖の上に立つ古びた鳥居だ。鳥居はこちら側、要するに海側を向いており、まるで参道が途中で削りとられ鳥居が向きだしになっているようだ。その鳥居から石塁までは高さ60mほどの急斜面で人工的に山を削ったように見える。カメラを手に草原へ足を踏み入れた、幸い草が膝小僧あたりまでの高さしかなかったので、急に沼のようなものにはまらないかびりながらも、草を踏みしめ石群のところまで来た。遠目からみても感じたのだが中世の石塁ではないようだ、素人目だが、今まで見てきた山城の石塁はこれよりも一つ一つが小さくこけむしていた。それに対しこの石塁はひどくは苔むしてもおらず比較的新しいのではと思えた、しかし環境の違い、石の性質の違いによって、風化具合が異なることもあるかもしれないが、その辺は私にはまだ分からない。またこの地域からは石器時代の遺物も出土していることから佐世保の考古学研究の第一人者である松瀬さん一行が調べ尽くしている場所でもあり、中世を遡るような遺跡でないことは間違いないだろうと思われる。石塁の規模だが土に埋もれている部分もあるが約30メートルくらいにわたり高さ1メートル程の石塁が平場に張り巡らされている。この石塁が何なのかということだが、普通に考えて石塁があるので時代は分からないが、明治とか大正時代の民家の石塁の跡ではないかと考える。頭上にある神社に関する郡司の館なのかもしれない。しかし合点がいかないのは周りにある巨石だ。家を建てるのには邪魔になるであろう場所にも多く埋まっている。その分散のしかたはランダムで人がおいたようには思えない。そのことは畑を囲む石塁という可能性をも低くしている。数枚写真を撮っていると近くで牛の鳴き声が出た、ふと**牛の放牧の柵**か？との考えも浮かんだ。日が暮れ始め眼下には九十九島の絶景が広がっていた。暗くならないうちに気になる崖の上の鳥居へと急ぐことにした、今日の目的は夕日を撮ることじゃないぞと自分に言い聞かせながら。キレイな夕焼けを背に車を上へ走らせるとやがて巨大な**風力発電機**が姿を現した。駐車場があり説明版もある。夕焼けをバックにそびえる風車には息をのんだが今回は風車の撮影でもない、おそらくは鳥居があるであろう山頂の茂みを見たが、あたりが暗くなってきたう簡単には鳥居まで辿り着けそうになかったので鳥居の調査は断念した。

家へ帰りインターネット検索による調査をした。分かったことは崖の上の神社は**宮地嶽神社**といい、行くのを断念した山頂の鳥居のある場所にはわりと大きな祠があるようで、その山を地元の方は**宮地岳**と呼んでいるそうだ。他には宮地嶽神社からみて東南の方向に戦時中に造られた**砲台の施設跡**があるということで、もしかしたらこの謎の石塁も戦時中のその手の遺産かとも考えた。



※鳥居のアップ。額束(がくづか)には宮地嶽神社と掘られてある。



翌日、図書館へ行き鹿町郷土史を読みあさったところ風車が設置してある草原一帯を**盲目ヶ原**または**目闇ヶ原(めくらがはら)**と呼び、その地名にまつわる琵琶法師の悲しい話や平家の落人が宇久島を目指し目闇ヶ原を越えて鹿町から海を渡っていたなどの伝説を知り、宮地嶽神社の祭りが4月に行われていることと神社の創立が**明治27年(1894)**であること、そして鹿町といえば炭鉱の歴史があり、**映画「空の大怪獣ラドン」の撮影地**として使われたという意外な事実を知った。が、いずれも今回の謎の石塁群とは直接的な関係はなさそうだった。

現地調査、ネット調査、書物調査、以上の調査で結局正体はつかめなかった。残る調査は聞き込み調査。今回は電話によるものだ、まず**鹿町歴史民族資料室**へ問い合わせしてみる、そこで開拓団のお話などいくらかのお話は伺えたが確たる返答は得られなかった。しかし謎の石塁群の場所より鹿町方面に300m程下った所にある**潮音院(ちょうおんいん)**というお寺があり、そこでご住職だったらご存じかもしれないということで連絡先を伺った。はじめに電話した時はご住職が留守で奥様が対応してくださったのだが、そこでまったく想像してなかった事実が発覚した。23.4年程前にこの目闇ヶ原一帯に**長崎サファリパーク**があったというのだ、私が車で鹿町ウィンドファームの看板から進入したあそこがまさに、当時のパークへの入り口で現在の風力発電機が建っている丘周辺にライオンやら熊やらカバといった動物たちがいたというから驚きだ。となればあの石塁の場所は何かしらの動物がいて、それを囲うための石塁という可能性が非常に高い、そういわれてみれば、名前も分からぬ木の姿はサファリパークにあるような木で、分散した巨石も動物たちの憩いの場として活用されていたと考えれば合点がいく。ネットで鹿町 サファリと検索してみれば確かにここに短い期間だがサファリパークがあったことは確かで、ほぼ結論が出たと思えた。



※全体の写真。平場にある石塁の後ろには急斜面の崖があり、その頂上に古い鳥居が海側を向いて立っている

ところが、数時間後、留守だったご住職から電話をいただいた。ご住職はサファリパークがあった当時のようすをよくご存じだろうということだったので、あの石塁には何の動物がいたのかという突っ込んだ所まで聞けつもりで伺った。が意外にも答えは、動物たちがいたのはそこよりもっと上の地点で、そこには動物はいなかったということであった。また振り出しかとおもいきやご住職が続けて言われたことは、あの石塁は崖の上から落ちてくる岩や土砂から畑や家屋を守るための石塁ではないかということだった。というのもその石塁造成にはご住職の潮音院が少なからず関わっていて、潮音院は**天正2年(1574)**には存在しており、創立の起源はそれ以前にさかのぼるといふ、大変由緒のあるお寺なのだが、その頃のお寺の場所は今の場所よりもっと上の、山手側にあったという。古い記録によれば、ある日の**山津波**によって寺が倒壊したため、今の場所に再建されたということだった。その後、犠牲者を伴う**供養塔(今古庵谷)**が建てられ、今に残されている。寺の再建の時期が**文化12年(1815)**ということなので、あの石塁はその後造られたものであろうから時代的には江戸時代中期頃ではないかと思われる。おそらく現在謎の石塁がある草原はその昔は山の斜面であり、大規模な土砂崩れがおきて出来た平場だと思われる、そしてその後もたびたび土砂が崩れて畑や民家に被害がでるので防壁を造り上から落ちてくる土砂や岩を食い止めようとしたのではないだろうか。その後、福岡から**浜田姓**を名乗る人々がこの地に移住してきた時に山の頂上に宮地嶽神社を創建して山の怒りを静める意味もあるのだろう海側に向けた鳥居が建てられ、二度とあのようなことが起こらぬようにと人々は山に向かって拝むようになった。

今回私が見た草原の石塁と崖の上の鳥居という不思議な景観の背景には、そのような人々の自然の脅威に対する実践的な防御と精神的な信仰との物語があり、それらがつくりだした景観だったのだ。

今回の取材にご協力してくださった皆様には深く感謝致します。ありがとうございました。

追記

今回の調査の結果を踏まえてもう一度いきたいと思う、巨石の7割が土に埋まっていた現状から考えると度重なる土砂崩れで土が堆積し今のような地形になったのだろうか、最初の大規模な土砂崩れの際に土砂と一緒に流れてその時に今の地形になったのだろうか、というのも土砂を塞ぎ止めるにはかなり頼りない石塁にも見える。とすれば実際に土砂を何度も食い止めた石塁は初めはもっと大規模なもので今は大半が土に埋もれてしまっているのか、それとも現在の石塁の姿と出来た頃の姿はほぼ変わらず石塁が作られてからの土砂崩れはなま現在に至るのか、という疑問から実際に現場へもう一度行き、石塁の埋もれ具合をみてみれば何かわかるのではないだろうかとも思っている。だが自分のHPのテーマである戦国時代とは話がだいぶ離れてきたので、まあ暇があるときにでも行くのかなという感じだ

